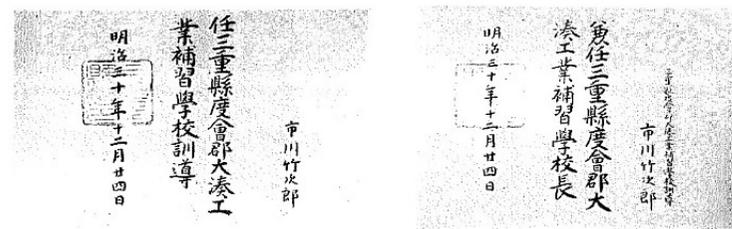


大湊工業補習学校



市川竹次郎氏

わが国の造船教育・大湊工業補習学校



市川竹次郎辞令

市川竹次郎辞令

第二章 大湊工業補習学校

第一節 わが国の造船教育

わが国の造船教育は、既に安政の時代に始められたと伝えられる。しかし、国事多難のため造船教育専門の施設は見るべきものがなかったようである。明治維新に至り、国際関係が発展するに及んで、漸次海軍省・工部省は造船技術者養成に努めるようになった。当時、世界の造船王国であった英国は、グラスゴー大学に於いて優秀なる造船技術者を養成していた。これが大いにわが国の造船教育に刺激を与えることになった。

造船学教育を開始した学校、並びに、年度は次の通りである。

横須賀学舎：明治3年

工部大学：明治13年

東京帝国大学工科大学造船学科：明治19年

東京高等工業学校：明治14年

東京工手学校：明治22年

第二節 大湊工業補習学校

造船教育が盛んになりはじめると、伝統ある造船の町大湊が為政者の目に留らぬ筈はない。明治28年6月、辻新次・加納治五郎が用務をおびて大湊の造船所・鉄工所を視察した時、大いに職工教育の必要を論じた。そして、工業補習学校設立の提案をしたのである。町の有力者達もその提案に賛成して学校設立の企画に乗出すことになった。時の町長山中崔十と小学校長鳥羽初太郎が発起人となって数名の商議員を設け、設立準備に着手したのである。各地の実業学校に照会して参考資料を集め、学校規則書を作り、仕事を進めて行った。県書

記官中村治郎、県属竹田喜太郎、鈴木敏勝、上野録二郎らの奔走で、漸く準備体制は整えられた。

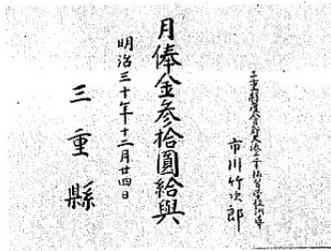
明治29年4月、大湊工業補習学校の設立を出願、同年5月22日文部大臣西園寺公望より設立を認可されたのである。そして、同年7月から同34年6月迄5ヶ年間、実業教育費国庫補助法により、毎年金500円を交付されることになった。こゝに於いて鳥羽初太郎と石谷吉平が本校教員に任命され、7月27日、大湊尋常小学校校舎を仮用して授業を開始するに至った。造船、鉄工の徒弟を養成するのが主眼であったから、昼間は工場で作業実習、夜間は造船鉄工に必要な学科を教えた。この頃、町長山中崔十及び町会議員らは、校舎新築の必要を認め、次の新校建築委員を選定した。

山中 崔十	楠木寅三郎	松本 久七	菊川 仲助
楠木 彦助	中川才次郎	松崎与次兵衛	中川 弥作
中川 銀藏	滝本四郎吉	西川 駒三郎	鳥羽弥三郎
橋本 広吉	吉川 重助	木野本 武吉	市川 源吉
内田 文六	鳥羽初太郎	山本 清吉	高松 宗平

以上20名の新築委員集議の上計画を決議し、早速工事が始められた。明治31年3月24日竣工、三重県知事田辺輝実・第三課長澤田重造・度会郡長満田勇之助臨席の下に開校式が挙行された。知事の祝詞は次の通りである。

維時明治31年3月24日度会郡大湊工業補習学校並ニ尋常小学校新築工成リ茲ニ開校式ヲ挙グ 本官親シク臨場ノ榮ヲ得タルハ誠ニ欣喜ノ情ニ堪ハザルナリ

抑モ教育ノ一國富強ニ関スルヤ最大ニシテ国民分野ノ分カル、所又実ニ教育ノ振否如何ニ関ス 今ヤ我国戦後ノ経営トシテ銳意教育ニ力ヲ盡スベキノ時ナリ 内地雑居ノ期モ亦将ニ近キニアラントス 況ンヤ東洋ノ風雲喧騰警戒急要ノ時ナルニ於テヲヤ 關戸縹緲トハ夫レ之レヲ謂フカ 既ニ実業教育ノ戸ハ朝野ノ間ニ噴タタルモ 未ダ微マシテ振ハズ 誰カ又其



市川竹次郎給与辞令

ノ隆盛ヲ希ハザランヤ 英独二国ノ今日アル其ノ富強ノ由テ来ルヤ遠シ
 実業教育ノ要アル知ルベキナリ 若シ夫レ小学教育ニ至リテハ 忠良ナル
 国民ト完全ナル人間ヲ養成スルニアリ 是レ実ニ國家百年ノ大計ニ属ス
 大湊町民諸子夙ニ茲ニ見ルアリ 校舎新築ノ工ヲ興シ子弟児童ノ教養ニ便
 ス 寔ニ感稱ニ堪ヘザルナリ 職ニ校ニ在ルモノ篤ク明治二十三年十月下
 シ賜ヒタル
 聖詔ヲ奉体シ能ク其本分ヲ盡サレンコトヲ希フ 式ニ臨ミ一言ヲ述ベテ以
 テ祝辞トス

第三節 設立の要旨

明治37年発行大湊町立造船徒弟学校一覽には、本校設立の要旨として次のよ
 うに書かれている。

我が帝國殷富ノ程度ヲシテ強兵ノ声言ニ伴ハシメト欲セバ必ズ力ヲ極メテ
 実業ノ振起ヲ企図セザルベカラズ是レ夙ニ當路者ノ着眼誘掖スル所ニシテ教育
 者ノ協心戮力スベキ者亦寔ニ此ノ点ニアリ我が大湊町ハ伊勢灣口ニ臨シ 皇大
 神宮御遷幸ノ當時既ニ水門ト唱ヘシ以來鎌倉足利ノ時代ニハ造船ヲ業トスル者
 次第ニ多ク織田豊臣徳川諸氏ノ為メニ兵船ヲ調進シタルガ如キハ能ク人ノ知ル
 所ナリ其他本町ニ於テ製造シタル船舶ニヨリテ渺茫タル大洋ヲ航シ異邦ニ往来
 シタル者モ亦極メテ多カリキ就中慶長年間ニ交趾ニ日本町ヲ建設シタル松本某
 ノ如キ實ニ本町ノ産ニシテ其ノ生涯ノ間交通ノ便ニ供シタル船舶ハ皆本町ニ於
 テ進水シタルモノナリシト云フ爾來幕府及ヒ諸藩ノ為メニ関船傳馬ヲ製作シタル
 事モ多カリキ延ヒテ明治維新後ニ及ビテモ依然先業ヲ繼承シテ設計装置頗ル
 觀ルヘキモノ多ク殊ニ近時ハ造船家ノ勵精ニヨリテ技術上大ニ進歩ヲ表ハシ各
 種ノ和船ハ勿論西洋形帆船汽船ヲ製造スルコト漸ク盛大ヲ極メ撞釘鑿音打々相
 応シ大ニ旧時ノ面目ヲ一新セリ之ニ随伴シテ鉄工業モ又其ノ形勢ヲ一變シテ頗
 ニ船舶需用ノ増加ヲ來シ汽閥器具ノ修繕又ハ其ノ鑄造ヲモナスニ至既シテ本町

開校記念撮影

不 不 島 不
 明 明 羽 明
 不 山 市 不
 明 中 川 明
 明 榎 竹 明
 十 次 次 明



ノ工業家ハ此ノ如ク改良進歩ノ氣象ニ富ミ銳意技術ノ發達ニ盡カスレドモ如何
 セム從來之ニ就事スル職工ハ簡易ナル学理ヲモ解セスシテ縝密錯雑ナル業務ニ
 従事スルニ至リテハ其ノ学識及ヒ智力ニ不足セル者アルハ當地工業家ノ常ニ遺
 憾トセル所ニシテ工業振作ノ点ヨリ見ルモ誠ニ痛歎スヘキ状態ナリトス故ニ本
 町在住ノ子弟ヲシテ之ニ授クルニ工業必須ノ教科ヲ以テシ堅實勤儉ノ氣象ヲ鍛
 練シ速成ト實用トヲ旨トシテ有益ナル高等ノ職工ヲ養成スルハ實ニ本町ノ急務
 ナリト云ハサルヘカラス依テ曩ニ文部大臣ノ認可ヲ得テ本校ヲ設立セシ所以也

第四節 沿革

明治29年7月、本校商議員規則を制定

同年8月5日、高北良一、本校訓導に任ぜられる。

同年10月27日、貴族院議員田中芳男、農商務局と共に本校を參觀。

同年11月9日、東京工業学校長手島精一本校を參觀、本町有志を集めて
 工業教育の必要な所以を説く。

同日、学級を分けて2学級とする。

同年11月30日、訓導高北良一、校長に任命される。

同年12月5日、校長高北良一、熊本県師範学校に転任。

同年12月28日、市川竹次郎、校長兼教諭に任命される。

同月、宮内省より日本美術全書を下賜される。

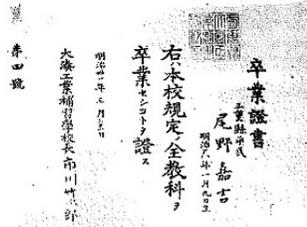
明治31年3月24日、校舎改築竣工し、開校式を挙る。

同年9月26日、第3師団より軍旗縮図一面を下付される。

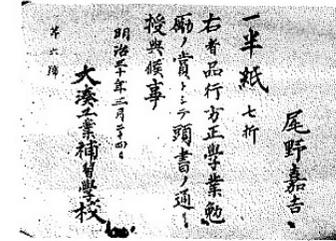
同年11月29日、文部参事官福原謙二郎・文部局高井利五郎、本校を巡視
 する。本校を従弟学校に変更すべき事に関し意見を述べる。

第五節 職員

職員異動については次の記録がある。



尾野嘉吉氏卒業証書（現存最古）



尾野嘉吉氏賞状

明治29年7月18日、大湊常尋小学校訓導兼校長鳥羽初太郎大湊工業補習学校訓導ニ兼任セラル。

同日、石谷吉平本校訓導ニ任ゼラル。

同年8月5日、東京工業学校附属教員養成所卒業生高北良一本校訓導ニ任ゼラル。

同年9月10日、三川富吉本校訓導心得ニ任ゼラル。

同年11月30日、訓導高北良一校長兼任ヲ命ゼラル。

同日、石谷翁藏本校訓導心得ニ任ゼラル。

明治30年1月20日、度会郡厚生尋常小学校訓導兼校長杉村謙一郎本校訓導ニ兼任セラル。

同年13月5日、訓導兼校長高北良一熊本県尋常師範学校へ転任ス。

同月24日、東京工業学校卒業生市川竹次郎本校訓導兼校長ニ任ゼラル。

明治31年3月31日、訓導心得三川富吉宇治山田町明倫尋常小学校へ転任ス。

同年7月22日、東京工手学校卒業生松崎藤三郎本校訓導ニ任ゼラル。

同年11月30日、訓導杉村謙一郎員弁郡高等小学校ニ転任ス。

第六節 経 費

収 入 支 出

	29年	30年	31年		29年	30年	31年
国庫補助	375円	500円	500円	給料	850円	1,158円	1,242円
町税	817円	1,206円	1,247円	雑給	139円	193円	197円
計	1,192円	1,706円	1,747円	需要費	202円	355円	308円
				計	1,191円	1,706円	1,747円

第七節 来 観 者

主なる本校来観者氏名を次に記す。

明治29年中

本県師範学校長 深井 弘 農商務属 下 啓助
 貴族院議員 田中 芳男 東京工業学校長 手嶋 耀一

明治30年中

本県知事 田辺 輝實 文部属 服部 譲
 香川県阿野鵜田郡長 林 正幹 三重県属 上野録二郎
 三重県属 阿曾元之助 長崎県中海義塾長 降 彦郎
 東京工業学校附属教員羽成所教員 一戸 潜力

明治31年中

本県知事 田辺 輝實 本郡長 濱岡勇之助
 山田警察署長 平田 行雄 本県属 澤田 重遠
 本県属 上野録二郎 本県属 阿曾元之介
 三重県視学 後長松二郎 鈴鹿郡視学 稲垣 茂郎
 文部属 木村峯之助 文部属 一瀬久米吉
 本郡長 濱岡勇之助 本県知事 秀家 裕二
 文部参事官 福原謙二郎 文部属 高井利5郎

寄 稿

尾 野 嘉 吉 (明治31年3月補修学校卒)

大湊工業補習学校ハ、明治24年大湊尋常小学校内ニ創設セラレタ。時ノ町長山中崔十先生ハ、賢明ニシテ愛郷心ニ富ミ、青年中年老年ト一生ヲ町ノ発展ニ尽力セラレタ篤志功勞人デアッタ。

往古ヨリノ古キ歴史ヲ持ツ造船並鉄工業ノ一層隆盛繁栄ヲ計リ、各工場ニ働く職工ニ技術ノ養成ガ目的デアッタ。各職工ガ、夜ノ休養時ヲ利用シテノ勉学